

2015.8

(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

8号

第37巻
No.313



イタドリ *Polygonum cuspidatum* Sieb. et Zucc. (タデ科 *Polygonaceae*)

生薬 コジョウコン（虎杖根）茎葉部が枯れた秋から冬に根茎を掘り取り、水洗後長さ10cm程度に切ってから陽乾する。

成分 anthraquinone 配糖体：polygonin、stilbene 誘導体：resveratrol、flavone 配糖体、tannin 等。

効能 民間薬として緩下、利尿、通経薬として常習便秘、膀胱炎、月経不順、閉経、関節炎に用いる。

生薬 イタドリ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



日本各地や台湾、韓国、中国の荒地など日当たりのよい所を好み、1.5mにもなる大型、雌雄異株の多年草です。地下茎や多くの種子で繁殖し、日本国中どこでも見ることができることから古くから色々の書物に登場します。

『本草綱目啓蒙』(1803)に虎杖の別名としてイタドリ、タチビ(古名)、サヒタヅマ(古名)やその他多くの方言名が載せられています。古事記(712)には下巻の二、履中天皇

(389?-432)・反正天皇の項に「お馬にお乗せ申し上げて大和にお連れ申し上げました。そこで河内の多遅比野においでになり、目が瘧め、此処は何処だと仰せられましたから、阿知の直がもうすには、墨江中王が大殿に火をつけましたのでお連れ申し大和に逃げて行くのですと申しました」と記されています。多遅比野は今の堺市の辺りで、イタドリが一面に繁っていたことが推測されます。『日本書紀』(720)の巻第十二、反正天皇(378-437)の項には「ここに井戸あり、瑞井と曰う。すなはちこれを汲みて太子を洗う。時に多遅花落ちて井戸の中に入り、因りて太子の名となすなり。多遅花は今の虎杖花なり。故に多遅比瑞齒別天皇という。」と多遅比が虎杖であることが明記されています。

虎杖は中国の本草書『名医別録』(502-536)の中品に収載される植物です。平安中期の『枕草子』には「見るにことなることなきものの、文字に書いてことごとしもの、覆盆子。鴨頭草。……いたどりはまいて虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべきかほつきを」と見ると書くと異なる物を挙げています。因みに李時珍(1518-1593)は「杖とはその茎を形容したもの。虎とはその斑を形容したものだ」と語源を説明しています。日本で虎杖をイタドリと表現するようになったのは平安時代と考えられます。『新撰字鏡』(892-901)や『本草和名』(918)、『和名抄』(931-937)には「伊太登利」、「以多止利」、「伊太止里」と仮名をあてています。語源は「痛取り」と言われています。

和歌にはもう一つの古名「サイタヅマ」を使うのが普通です。春早く芽を出し、食べられる草の意で「先立つ菜」が転じたとも伝えられています。後拾遺和歌集(1086)には

野辺見れば弥生の月のはつるまで まだうら若きさいたづまかな 藤原義孝

『和漢三才図絵』(1713)には「大抵高さものは三、四尺を過ぎていない。然れども松前の虎杖は高さ丈余り、木の如く」との表現があります。前出の『本草綱目啓蒙』にも「最長大にして茎の圍三四寸、高さ丈余りに至る……蝦夷には圍六七寸、高さ一丈五六尺なるものありと云ふ」とあります。これは草丈3mに達し、京都以北の日本海側、北海道、千島、樺太に自生するオオイタドリ(*P. sachalinense*)を指しています。大きさだけでなくイタドリの葉の基部が切形であるのに対し、オオイタドリは心形をしているので見分けることができます。イタドリと同様に薬用や食用に用います。

(村上守一 記)